

# 言語とイメージの「ウイルス的転回」

—情報の感染から身体を守る別の生活様式—

## A “virologic turn” of the language and image

To protect the body from the infection of the information in another way of lifestyle

霜山博也\*<sup>1</sup>

Hiroya Shimoyama

\*<sup>1</sup>名古屋芸術大学 Nagoya University Of Arts

**要旨:** この研究ではウィリアム・バロウズの言葉、「言語はウイルス的存在」をヒントに、言語とイメージがメディアを介して人間に感染するものとする。そこから、フェイクニュースの構造を分析し対抗策を提起する。

**キーワード:** フェイクニュース、メディアの情報、言表、身体へのイメージ、ウイルス的存在

**Abstract:** In this research, referring to William Burroughs's word, "the language is a Virologic entity," the language and image will be a virus infecting humans via the media. I will analyze the Fake news structure to propose the countermove.

**Keywords:** Fake news, Information of media, Utterance, Image to the body, Virologic entity

### 1. はじめに

この研究では、作家ウィリアム・バロウズの「言語は宇宙から来たウイルスである」という言葉、いわゆる言語ウイルス理論から影響を受けつつ、それを現代情報化社会における情報といかに向き合うかという哲学的考察へと広げることが目的である。「ウイルスとは何か」、「ウイルスとどう共存するか」などの研究や報告は多くなされている。それは、ウイルス自体やそれが与える影響についての考察、つまり、ウイルス《を》、あるいは、《について》考えることは一般的に行われていることを意味する。それに対して、本研究では実験的なアプローチをとり、ウイルス的な考えを極限まで推し進めることで、ウイルスから逆にどのような思考を私たちが得られるかを確かめてみたい。それゆえに、言語とイメージを、情報化社会のメディアを介して私たちの身体に感染するウイルス的存在とみなすことで、感染すると人間の思考と身体による行動にどの

ような影響を与えるのか、それに対抗する別の思考と身体のあり方はあるのかどうかをこれから探っていく。

人類は感染症に悩まされ続けてきたが、その原因となるのが「細菌」と、独特の生と死のあり方を持ち生命の定義を揺るがす「ウイルス」である。細菌は他の生物と同じように細胞を有しており、独力で分裂によって増殖することができる。

一方、ウイルスは独力では増殖できない。ウイルスは、遺伝情報を持つ核酸と、それを覆うタンパク質や脂質の入れ物からなる微粒子にすぎず、設計図に従ってタンパク質を合成する装置は備えていないからだ。しかしウイルスは、ひとたび生物の細胞に侵入すると、細胞のタンパク質合成装置をハイジャックしてウイルス粒子の各部分を合成させ、それらを組み立てることにより大量に増殖する。そのため、

\*<sup>1</sup> 名古屋芸術大学 芸術学部, 〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼 65  
E-mail: bte5084@yahoo.co.jp

ウイルスは「借り物の生命」と呼ばれることもある。[山内, pp.3-4]

ウイルスが細胞内に侵入すると「暗黒期」が生じ、「ウイルスの核酸とタンパク質はばらばらになり、感染力を持ったウイルスは消えてなくなってしまう」[山内, p.5, 傍点引用者]。そして、乗っ取られた細胞はウイルスの核酸とタンパク質を合成させられ、子ウイルスが大量に生じる。さらに場合によっては、遺伝情報にコピーミスが起こり、変異ウイルスや新種のウイルスが出現することもある。細胞の外では、ウイルスは物質同然であり、ただの粒子にすぎなくなる。生物ではない非有機体となるのだが、活動していなくても感染力を持っており、宿主を見つければ活性化するので「生きている」といえるだろう。だが、ウイルスは熱、紫外線、薬品などに弱く感染や増殖ができなくなり、その状態だと「死んでいる」といえる。ただし、他の複製された同じウイルスは生きているのであり、自己をさらにコピーさせ続けて生き延びている（自己と同じ他者は生きている…）。また、不活性状態であっても損傷を受けていない部位をウイルス間で集めて、再利用することで生き返る特別なウイルスもいる[山内, pp.19-20]。

ウイルスは細胞を有しないので生物とは言い難いが、その代わり細胞の仕組みを乗っ取って自己の情報を複製するのであり、身体を捨て、情報として生きる[山内, p.85]特異な存在である。そこでは生/死、生命/物質、オリジナル/コピー、自己/他者という二元論、その境界はつねに揺らいでいる。生物はこうした二元論のうち前者であることによって生きている。それに対して、この二元論の構造自体を揺るがし、身体を捨て去ることで、ウイルスは存在することが可能になっている。以下では、ウイルスのあり方、ウイルスから得られた思考をさらに活かすことにする。まずは、バロウズの言語ウイルス理論を検討し、つぎに二元論の構造を批判するジャック・デリダの「脱構築 [déconstruction]」をそれと結びつける。さいごに、ドゥルーズ＝ガタリの言語理論から思考/身体の問題を考察する。その狙いは、情報化社会のウイルス的思考から、ウイルスが捨て去った身体の別のあり方を逆に得ることである。

## 2. 感染するウイルスとしての言語

バロウズの「言語は宇宙から来たウイルスである」という言葉は、小説『ノヴァ急報』に出てくるものだが、その後もたびたび言及される考え方である。「ジャンキー（麻薬中毒者）」として有名であった彼だが、やがて麻薬と決別する姿勢を見せ始め、その頃からこの理論が語られるようになる。麻薬は通常では聞くことのできない幻聴と見ることのできない幻覚を生じさせる。それは確かに異様な経験となり、場合によっては斬新なインスピレーションや想像力の源にもなるであろう。しかしながら、この「特異さ」や「斬新さ」は本当に日常経験からかけ離れたものだろうか。むしろ、日常の経験を前提として、それを基準として違いが語られているに過ぎないのではないか。幻聴も幻覚も本当に存在しなかったものというよりも、その時その場所では適切ではないものが現れているだけではないか。それを文章で表現したとしても、かつて見たこと・聞いたこと、人間の想像力から派生したものに過ぎない。結局のところ、人間という「主体」を前提にして考えると、それを基準にするしかなくなり、基準からの違いしか思考できないのだ。

それゆえに、バロウズは考え方を転回する。彼は「人間が言語を使用して思考し想像する、あるいは、それを言葉によって表現する」という、主体を前提とした考えを止める。むしろ、「言語は変異し続けるものであり、宿主である人間に感染することで新たな思考を生み出す」と考え方を変えるのだ。言語が宇宙から来たかどうかは知らないが、その「ウイルス的転回」には二つの利点があり、以下の発言に示されている。

言葉は、もちろん新聞によって用いられている、支配のもっとも強力な武器の一つだ、それにイメージも、新聞には言葉とイメージの両方がある……それをカット・アップして並べ直してゆけば、支配するシステムを打ち破ることができる。恐怖と偏見はつねにコントロール・システムに用いられている、教会が異端への偏見の上に形作られているように。それは人々固有のものではない、その時にコントロールを握っていた教会によって打ち立てられたものだ。あらゆるエスタブリッシュメントにとって、エスタブリッシュメントの地位を脅かすものだから、それゆえそれは抑圧さ

れ、人々は恐れ、拒絶し、冷笑するように仕向けられる [パロウズ, 1992, p.134, 傍点引用者]

まず一つ目は、情報化社会における、情報のあり方の問題である。私たちは「私」「自分」という主体が自由に考えていると思っているが、どこかですでにメディアが発信している情報に感染しているのだ。情報は一定のコントロールのために編集されており、私たちは恐怖や偏見という情念によって、一定の行動をとるように気づかぬうちに仕向けられている。

純粋な「主体」が存在し、自分だけで思考と行動をしていると考え、このことに気づけなくなってしまう。あるいは、身体的情念を精神によって統御するというデカルト的な発想では、冷静になればいい、よく調べればいい、騙されないようにすればいいという、一見すると正しそうな考え方に陥ってしまう。この考え方がなぜ間違いなのかは、言語行為論をもとにして、どのようなプロセスで言語に感染するのかという問題と共に後述する。二つ目は、自由意志に変わる別の「自由」を見出せることだ。「人間が言語を用いて考え、何かを表現する」のではなく、「言語が人間に感染することで思考が生まれる」となると、もはや人間に自由は無くなるのではないか。この問題について、パロウズは言語というウイルスに対するいわば「ワクチン」を開発することで応えている。彼が編み出したのは、「カット・アップ」や「フォールド・イン」といった、新しい言語操作の方法である。「カット・アップ」とは新聞や雑誌が発信してくる情報である文章を、または自分でいったんその言葉に感染してみても書いた文章を、細かくバラバラに切り分け組み合わせて新しい文章にする技法である。「フォールド・イン」は同じく新聞や雑誌のページを折り曲げて他の文章につなげる、あるいは、2枚の紙を裁断して文章どうしをたがいに入れ込み、新しい文章を生み出す技法である。

これらの操作は、「人間が言語に感染することで思考が生まれる」ことを推し進めて、別の感染の仕方を作り、逆に別の思考を生み出すことを言語自体に強制させる。そして、新たな思考を人間は逆に取り入れ、言語ウイルスとの共生を可能にする。それは、細菌に感染するウイルスであるバクテリオファージを発見した人間が、逆に利用して感染症を抑えるファージ療法を発見したようなものだ。思考がウイルスの感染によって生まれるならばその原因はウイルスにあるが、言語操作によって言語に別の思考を強制させ、それを人間が取り入れるならばその原因は人間にある。ここに

自由の問題がある。デカルトは「我思う、ゆえに、我在り[Je pense, donc je suis]」という真理を発見した。これ以上疑うことができないものを彼は探したが、思考の原因を身体など別の因果系列にあるものに求めても、その考えは疑えてしまう。さらに、外部のものに依存して考えているので、それに振り回され誤謬が生まれる。それに対して、純粋に自分自身に向けた思惟は自分にしか原因がなく、誤謬からも解放されているからに由る（自由な）思考である。しかしながら、デカルトの間違ひはそもそも「我[Je]」と言えるのが言語のおかげ（原因）であり、言語に感染して生み出された思考なのに純粋な精神の思惟を装ったことだ。最終章では、パロウズの言語操作による思考とも異なる、別の自由な思考を見出すことになる。

### 3. 相対主義の罠とニーチェの警告

近年問題になっているフェイクニュースであるが、それを「ポストトゥルース」として考察するという、明確な政治的（学問的なものを含む）意図を持つ行為遂行をしたのがリー・マッキンタイアである。「ポストトゥルース」という考え方においては、真実が異議申し立てを受けているという側面ではなく、政治的な優位を主張するための手段として真実への意義申し立てがなされているという側面が顕著なのである[マッキンタイア, pp.12-13]として、以下のように述べる。

ポストトゥルースは現実とは関係ない。それは人間が現実に対応する仕方に関係する。いったん自身の認知バイアスに気づけば、わたしたちはそれを覆うためのより優位な立場に立てる…誰かがわたしたちに嘘をついても、わたしたちは彼ないし彼女を信じるかどうかを選べるし、あらゆる虚偽に異を唱えることができる。誰かがわたしたちの目をくらませようとしている世界に対してどのように反応すべきか。これは、わたしたちが決定できることだ。つねにそうであったように、真実はいまだに重要である。[マッキンタイア, p.217, 下線引用者]

さらに、ポストトゥルースの起源にはポストモダニズム（それが何を指すのか不明だが）があるとして、デリダとニーチェの名をあげる。デリダは、「あらゆる事象は『テキスト』に還元可能であり、したがって脱構築可能である。あらゆるものについて、ただひとつ

の正解があるのではなく、複数の答えがある[マッキンタイア, p.229]と図式化する。ニーチェについても、「真理・事実は存在せず、すべては解釈にしかすぎない(ニーチェ由来の遠近法主義)。いかなる真理の宣言もそれをおこなう人物のイデオロギーの反映に過ぎない[同上]とする。この認知バイアスに溢れる図式化には、読まずに(というよりも哲学的素養が無いので理解できない)批判するという不誠実さがまずある。さらに、そもそも何故フェイクニュースが生じるのかという根本的考察を一切放棄し、ただ「事実は事実であった。[マッキンタイア, p.216]と主張し、「それは事実ではない」と他人を非難すれば「より優位な立場に立てる」と本気で信じている不誠実さがある。

ニーチェは『善悪の彼岸』において「怪物と闘う者は、自分もそのため怪物とならないように用心するがよい。そして、君が長く深淵を覗き込むならば、深淵もまた君を覗き込む[ニーチェ, p.120]」と述べた。なぜならば、ある価値観を持つ者に対してそれを批判しても同じ土俵に立ってしまうだけであり、相手の価値観に巻き込まれてしまうからである。だからこそすべきなのは、何故その人がそう考えるようになったのかを先回りして思考することなのだ。ニーチェはある善と悪についての価値観があったならば、なぜその善/悪の価値観が生じてきたのかを背景まで掘り下げて思考することをつねに試みる。それは、その善と悪の向こう側(彼岸)にこそ、その価値観が生まれた条件があるからであり、彼にとってその条件を思考することが「現実に反応する仕方」なのだ(『道徳の系譜』)。たとえば、ニーチェは宗教、とくにキリスト教がどのように「ルサンチマン」という道徳を生み出したのかを説明する(他の時代や地域ではまた別の条件がある)。他人の価値観そのものを批判しても、余計な情念が湧き、自らも憎しみや嫉妬などに巻き込まれるだけだ。相手を非難すれば自分が相対的に優位になったように思われ自尊心を満たせるが、それはニーチェが指摘したように自分のことをまったく知らない弱者のすることであり、足の引っ張り合いにしかならない。

ニーチェの「遠近法主義」とは、世界についての視点が複数あるという相対主義ではなく、それぞれの視点が生まれる条件を批判的に思考することである。また、自分自身を基準にせず、思考が生まれる条件という「向こう側」へとあえて身を置くことで自分を変化させて、新たな思考を生成させることである(自分という「主体」への強い批判)。当然、マッキンタイアのようにいつも同じ価値観(科学主義)では、同じ

ような思考しか得られない。だからこそ、ニーチェはそのつど自分とその思考を変え、以前の「私[Ich]」を切り離し、別の思考を生み出すためにアフォリズム(断片的な思考)で文章を書くので。さらにいえば、「より優位な立場に立てる」というのは、自分にとって強いものを求める典型的な弱い意志の現れである。科学主義こそが彼にとっての政治的・学問的な強さなのだろうが、それは自分を強く見せてくれるものを求めているトランプ信者と同じである。「力への意志[Wille zur Macht]」とは、マッキンタイアのように自分にとって都合の良い立場(力・権力)を求めることではない。それは新たな思考を生み出すことで、世界と自分を変化させる存在しなかった「別の力」を他者のために生み出すことだ(生成という真理観)。ニーチェは「相対主義の罠」を警告したが、マッキンタイアはそれとも知らず自分から罠にかかっている。

#### 4. フェイクニュースの構造

マッキンタイアは重要なヒントをニーチェが与えてくれているのに、認知バイアスのあまり気づかず、彼が非難するものと同じ土俵に立って罠にかかっている。さらに問題なのは、フェイクニュースについて彼よりもはるか前に、そして、最も根本的・哲学的に思考したのがそもそもデリダであるということだ。

事実確認的と呼ばれる発言があります。それは理論的で、存在するものを語ること、存在するものを記述し、確認することです。また、行為遂行的と呼ばれる発言があり、それは話すことによって行います。たとえば約束するとき、私は出来事を語るわけではありません。私は誓いによって出来事をつくるのです。私は約束し、語ります。…「あなたはXを夫に、妻にしますか……?——ウイ。」この「ウイ」は出来事を語っていませんが、出来事をつくり、出来事を構成します。…出来事を無媒介に語り、無媒介に示す能力が発達するにつれ、語ることと示すことの技術は介入し、解釈し、選択し、選別しており、その結果、出来事がつくられるのだ、ということが知られています…私たちに求められている政治的警戒は、もちろん、出来事をつくり、解釈し、生産するにもかかわらず出来事を語ると称しているすべての機構について批判的認識を組織することです[デリダ, 2016, pp.16-18]。

これは1997年のデリダの発言であるが、彼は「言語行為論」の「事実確認的言表[constative utterance]」と「行為遂行的言表[performative utterance]」からフェイクニュースが生じる構造をすでに解明している。言語には事実を確認すること、報告することだけではなく、発話によって何らかの行為を遂行し、出来事を生じさせる機能がある。例えば、「お腹が空いたな」や「肩凝ったな」という言表は事実の報告ではなく、「夕飯を作ること」や「肩を揉むこと」を要求する行為の遂行をしている。また、デートでの「終電なくなっちゃったね」という言表もまた、事実の確認ではなく何らかの提案の行為遂行をしているのだ。

約束や誓いのように明示的な出来事の行為遂行ならばよい。しかしながら、これらの例だと本人の意図は行為遂行だが、実際に生じた言表は事実の報告・確認にみえる。それは、恐らく「自分からは言い出しづらい」、「失敗のリスクがある」、「失敗しても無かったことにできる」という気持ちの現れであろう。そして、フェイクニュースは別の意味で、実際に生じている言表と、行為遂行者の意図が離れてしまっており、そこには私たちが嵌りやすい大きな罠がある。分析のために、さらに「言表の主体[le sujet de énoncé]」と「言表行為の主体[le sujet de énonciation]」という言語学的な区別をつけよう。「言表の主体」とは言表内容にある主体、つまり、文章上の主語のことである。「言表行為の主体」は、発話や書くことによってその言表を生じさせた者である。例えば「《私》は学生である」という発話された言表の場合は、言表の主体である《私》と、実際に発話した人である言表行為の主体が一致するかどうかは真偽の決め手になる。言表行為の主体が学生であれば真であるし、そうではないならばそれは偽である(事実の確認・報告であれば)。

しかしながら、「ギリシアの真理は、かつて、『私は嘘つきだ』という、このただ一つの明言のうちに震撼された。[フーコー, p.307]」なぜならば、真か偽で考えると、この言表はまさに真偽不明になってしまうからだ。この言表行為は、「私は『《私》は嘘つきだ』と言う」という構造になっており、言表の主体と言表行為の主体が一致するかで真偽が問われることになる。言表行為の主体が真実を述べる人ならば、その人は「真実を述べる人」なのに、言表内容では嘘つきとなっており矛盾する。また、そもそも「真実を述べる人」なのに何故こんなことを言うのか分からない。言表行為の主体が嘘つきならば、言表内容と一致するように思われるが、そもそも嘘つきの言うことなのでじつは違

うかもしれない。事実の確認、そして真偽という基準で考えるとこの言表は意味をなさない。

だが、この言表を行為遂行の結果と捉えれば、実際はさまざまな効果を発揮していることが分かる。「僕は嘘つきだもん!」という言表は、親の説教など聞かない・反省などしないという開き直りの行為遂行を示す。「私…嘘つくからね…」という言表は、それを否定して欲しいという肯定の要求の行為遂行、あるいは、それ発話することで謎めいた人に見せて気を引くという駆け引きの行為遂行を示すだろう。真偽の基準であっては意味をなさない言表も、行為遂行による効果という側面から考えれば社会においても役割を担っているのだ(教員である論文の著者が書いた「《私》は学生である」という言表が、例文としての効果を持つように)。フェイクニュースやSNSにおけるデマの書き手がいて、「《私》は～を事実として聞いた」や「《私》は～を事実として見た」という言表があったとして、そこでは言表の主体と言表行為の主体は一致しているだろうか、あるいは、その言表は事実確認を意図しているだろうか。むしろ、これらの書き手はどんな言表でもいいので発信し、自分たちの都合の良い方向に社会や状況を変えようとする効果を狙った行為遂行をしているのではないか。つまり、フェイクニュースやSNSにおけるデマの書き手は、嘘などついてないのであり、それが真実や事実であるかどうかには無関心なのである。フェイクニュースの「《私》は～を事実として聞いた」や「《私》は～を事実として見た」という言表では言表の主体と言表行為の主体は一致しておらず、さらに、本人たちにとって言表内容は何でもいいきわめて空虚なものだ。

したがって、フェイクニュースに対しては、「ファクトチェック」という事実確認が呼びかけられているが、対抗策としては無力である。なぜならば、フェイクニュースは事実確認ではなく、デリダが言うように状況を変化させる出来事をつくらうとする行為遂行を狙っており、労力を割いて事実確認をしても「フェイクニュース!」と空虚な言表を逆に投げつけられるだけである。デリダの「脱構築」とは、真と偽のような二元論があった場合、じつはその二元論の構造を維持するため暗黙のうちに排除されているものを明らかにすることだ。さらに、その排除されているものがじつは二元論を可能にしているのであり、その境界を揺るがすことで、一番重要な問題に対して批判的機能を持つことを示すことである。フェイクニュースの問題において、それは言表の真/偽という二元論が排除する

効果という側面である。ジョン・オースティンが言ったように事実確認は、事実確認という行為遂行であり[オースティン, pp.230-233]、それは「事実を確認しました！これが事実です！」と認知させようとする効果を狙ったものでしかない。フェイクニュースは行為遂行なのに事実確認を装うが、ファクトチェックもどれだけ頑張ったところで事実確認という行為遂行にしかない。「事実は事実であった[マッキンタイア, p.216]」と事実確認という行為の遂行をしても、根本的な原因を考察してないので、「フェイクニュースが無くなる」という彼が望む出来事はいつまでも起こらないだろう。デリダはメディアをつうじたコミュニケーションによって、意図したものと逆になっていくこの問題を「倒錯行為遂行[performativity]」という概念ですでに提起していた。マッキンタイアは自分の真理観に固執するあまり、最も反応すべき現実であるフェイクニュースの構造を分析せず、フェイクニュースの書き手と同じく「これで変わって欲しい」と願い、信じることしかできないのである。

## 5. 情報の感染と自由な別の思考と身体

デリダは「『感染[contamination]: 混交、汚染』という言葉自体が不可欠なものとして私に課され続けた[Derrida, p.VII: デリダ, 2006, p.viii]」と述べ、さらに「問題になっているのはつねに…起源[origine]の起源的錯綜[complication]であり、単純なものの初発の感染であり、端緒における隔たりである[同上]」とする。ここで言われているのは本当に純粋なものなどありえず、気づかぬうちに別のものに感染して汚染されていること。そして、純粋な意図や考えであったとしてもその始まりとなる起源は、つねに別のものと混交していることである。たとえば、マッキンタイアは純粋な真理があると信じ、相対主義者としてニーチェを批判するが、「より優位な立場に立てる」という信念から逆にニーチェが警告していたはずの相対主義の罠に汚染されている。彼がこだわる真/偽も効果という側面を暗黙のうちに排除することで成立するものでしかない。また、「事実は事実であった」と言うが、事実確認は「これが事実です！」と周知させようとする効果を狙う行為遂行にしかない。その純粋だったはずの意図は、言語が必然的にはらむ問題によって汚染されている。このように私たちの思考や行動は、つねに意図してない別のものが混ざっており、自分が気づかないうちに何かに感染しているのだ。ただし、それはウイルスが発症という効果を発揮しないと存在が分からないよう

に、つねにすでに後から、差異をもたらしていたもの（自分を変異させていたもの）が痕跡として分かるだけである（「差延[différance]」）。

しかしながら、ある意味では免疫的な「ワクチン」として、この汚染をもたらす感染させたものは、真と偽の二元論における「効果」のように最も重要な批判的機能を担っている。冒頭では生/死、生命/物質、オリジナル/コピー、自己/他者といったものが出てきたが、二元論はどちらかが上か下、優位と劣位という関係を持つ。自己/他者はある意味では免疫系の問題にかかわるが、感染をもたらすものは、私たちがどこで自分についての境界を引いてしまっているのかを明らかにしてくれる（「パルマコン: 毒=薬[pharmakon]」）。この「毒=薬」を見出すためには、さらに人間の身体にどのようにメディアからの情報が感染するのかを分析しなければならないだろう。現代で起こっていることは、メディアから発信される言語がある人の身体に感染し、社会における、あるいは、他者から見たその身体へのイメージ（見方）を変えるような現象である。

そこでさらに、言語学の「シフター[shifter]: 転換子、転位語」という概念を導入して分析をしてみよう。「シフター」とは、状況や文脈が特定されない限りは何を指すのかわからない語である。たとえば、《私》、《あなた》、《今日》、《いま》、《あれ》などであり、その語が何を指すのかが情報が与えられていないと混乱することがある。そして、ポピュリストが最も得意とするのが、この「シフター」を用いた敵と味方を分断させ、憎しみや怒りなどのネガティブな情念を増大させるメディアをつうじた言表行為である。たとえば、安倍晋三の「《こんな人たちに、《みなさん》、《私たち》は負けるわけにはいかない」という言表があったが、彼の巧妙さは《みなさん》と言った後に、それを《私たち》と言い変え、言表の主体を一人称複数にしていることである。この言表行為が行っていることは、そこにいる誰かを指す（事実確認の）フリをしながら、じつは「お前は《こんな人たち》か？」と迫って問う行為遂行をしているのだ。

[この]言表行為は、一定の社会政治的な状況において、その状況そのものを変えようとして発せられたものだ。『支持者』に訴えかけ、『反対者』を特定することで、このような言表行為は『反対者』を脅しつけ、『支持者』を再確認し、強化す

る。仲間を見つけだし、新しい協調関係を打ち立てるために[ラッツァラート, p.226]

おそらく、このタイプの言表行為を日本で最初に行ったのが、小泉純一郎であり、彼が発明した「シフター」の《抵抗勢力》も同じ効果を担っている。動画などで炎上商法をする者は《みんな》という「シフター」を多用することでファンとアンチを分けて、たがいに憎ませ怒らせることで、両者に自分の名前をネット上で拡散させ、自分を宣伝させるのである。アンチであっても憎しみや怒りを持たせれば味方になってくれるのだ。一部の政治家がする《公務員》叩きや、トランプ大統領の《偉大なアメリカ》も同じである（「お前は俺の望む《偉大なアメリカ》になるのか？」）。

ドゥルーズとガタリは「言語活動の基本的統一性、言表とは指令語[le mot d'ordre]である[p.165]」と定義し、言語は服従し、服従させるために作られているという。「私は学生です」と発話するとき、そこには社会に合法的に属する者であること、学生という社会的身分を認めることを示す。また、《僕》、《俺》、《彼》、《彼女》は性別を勝手に二分してしまう「シフター」である。同性愛者であったロラン・バルトが言ったように、社会が許容しないのは同性愛ではなくただ何者でもないことであり、「お前は何者か」という問いには「シフター」を用いて自分の所属と身分を必然的に示すことになってしまう（『テキストの出口』）。言語はそもそも命令からなっており、決まりきった「問い」しかその中には存在しないのだ。《こんな人たち》や《偉大なアメリカ》という問いには、敵になるのか味方になるのかという、二つの答えしかあらかじめ与えられていないが、問題はさらに先にある。

これらの行為は、与えられた社会の内部にいきわたり、この社会の身体に向けられる非身体的変形の集合によって定義づけられるように思われる。…身体にかかわる行動と受動と、非身体的な属性にすぎない、あるいは言表による「被表現」[表現されたもの]にすぎない行為を区別しなければいけない[同書, p.174]。

言語は身体を物理的に変化はさせないが、その人の非身体的な属性（どのような者か）、その身体へのイメージを変化させる。たとえば、裁判官の有罪宣告は被告を受刑者に変えてしまうのであり、

まったく別の属性を持つ者として扱われることになる。差別的なレッテル貼りが悪質なものは、その一言で他人の属性を勝手に変えて、被差別的なイメージをその人に感染させるからである。《こんな人たち》や《偉大なアメリカ》などの「シフター」は、ただの代表者でしかないのに「自分＝国家」というイメージを生みだし、一方的に他者の身体に感染させることで味方だけの集合体を国家にしようとする。

フェイクニュースの「《私》は～を事実として聞いた」や「《私》は～を事実として見た」という言表では言表の主体と言表行為の主体は一致しておらず、あくまで社会や状況を変えるための行為遂行であった。しかしながら、この《私》という「シフター」によって味方に分類され、怒りや不満の情念を持つ別の人へと感染することになる。人間は赤の他人に共感することは難しいので、他人の幸福や喜びに大きな反応をするのは難しい。しかしながら、憎しみ・怒り・不満などの情念については、積極的に他人の肯定と共感を求めている。したがって、幸福や喜びは伝わりにくく広がりにくい、ネガティブな情念は拡散し増大しやすいのである。だからこそ、フェイクニュースの言表にある《私》は感染しやすい。感染した同じネガティブな情念を持つ人は「《私》は～を事実として聞いた」や「《私》は～を事実として見た」という情報をネットや社会にまた送信し、その連鎖がさらに続いていくのだ。

また、2020年の3月以降、愛知県内で新型コロナウイルスに感染しているかのような発言をして逮捕される事件が相次いだことも、これと同じ構造である。

「《俺》はコロナ」という言表は実際には感染してなかったのが偽であり、事実確認的なものではない。むしろこれは、何とかして自分のことを見て欲しい、自分が存在することを分かって欲しい、という願望を示す行為の遂行である。これを公の場で言ってしまうと、「非身体的変形」が生じて逮捕されてしまうのだが(市民から犯人・容疑者へ)、この言表によって自分に感染するイメージに頼らなければいけないほど、不安感、孤独、生活への絶望を抱えていたのだろう。彼らの願望は「コロナ」というイメージ、犯罪になる行為遂行によってしか成就しないものなのだ。そしてさらに、メディアをつうじて「《俺》はコロナ」という言表が拡散され、《俺》という言表の主体が、同じように不安・孤独・絶望を抱える人にも乗り移り、同じイメージをさらに感染させることになる（「《俺》もコロナ」）。

「言語」と「イメージ」はウイルス的な存在であり、ソーシャルディスタンスを取ろうが、ステイホームをしようがメディアをつうじてやってきて私たちの身体に感染するのだ。そうなると逃げ場はないのだが、「ワクチン」となるものや対抗できるものはないだろうか。

1989年11月9日、ある重要な記者会見が当時の東ドイツで行われた。社会主義の国で民主化革命が続けておき、東ドイツ国民も不満を爆発させそうな状態のため、国民の暴走を恐れた東ドイツ政府は11月10日に旅行を少しだけ自由にすることにした。しかしながら、ギンター・シャボフスキー（東ドイツのスポークスマン、報道官）は、会議を途中で退出しており、自分が読む原稿が「旅行許可に関する出国規制緩和」であることを理解していなかった。それゆえに、旅行のことであることを言わずに、彼は勘違いで「ベルリンの壁を含めて、すべての国境通過点から出国が認められる」と発表してしまう。さらに、「いつから？」の質問に、「私の認識では『直ちに、遅滞なく』です。」と答えてしまった。万全の国境警備を整えるために「明日から」のはずなのに、「今から」と言ったためにベルリン市民が国境に大殺到し、「そう言ったのだから、国境を解放しろ！」と興奮して主張した。数時間後に国境ゲートは解放され、東西冷戦の象徴だったベルリンの壁は崩壊することとなった。

この世界を良い方向へと変えた勘違いによる言表行為は、情報の感染から身体を守り、別の仕方でも生活していくためのヒントがある。この場合、言表は「東ドイツは国境を自由にする」であるが、意味は「国境の解放」ではなく、政府が意図したように「少しだけの旅行の自由」を認めるというものであった。また、言表行為の主体はシャボフスキー（政府の報道官）であり、言表の主体は東ドイツという国家である。国家は実体ではないので報道官（代表者）が代わりに意志を表明するしかないのだが、そこでシャボフスキーが勘違いをして説明の足らない言表を生み出した。通常時であれば、国民は政府の発表を疑問に思うだろうし、政府もすぐに弁明や取り消しをするだろう。しかしながら、「東ドイツは国境を自由にする」という言表はメディアをつうじて勝手に独り歩きをする。とくに重要なのは、「東ドイツ」という言表の主体がただの《東ドイツ》という「シフター」になり、最後は「〇〇〇は国境を自由にする」という言表にまでなったことである。この「シフター」が自由を求める民衆の身体に感染し、壁を打ち壊す集団的な行動へと突き動かしたのだ。あるいは、この《東ドイツ》という「シフター」

は国境を越えて世界中の平和を求める民衆の身体にも感染し、世界が変わる出来事にも発展していった。

そのとき、もはや《東ドイツ》は東ドイツという国家を指してはおらず、「〇〇〇」と誰にでも当てはまるものだ。この「シフター」が指し示しているのは、怒りや憎しみという情念を消し、喜びという情動だけを持つ平和と自由を求める存在というイメージである。この世界を変えた言表行為は、シャボフスキーによるものではなく、世界中の人が共に生み出した対抗的な集団的言表行為なのだ。このウイルス的な「言語」と「イメージ」の感染によって生じた身体は、《こんな人たち》や《偉大なアメリカ》による国家とは異なり、ネガティブな情念を持たない、身体に張り付いた国境や境界のあるイメージの属性を打ち破った別の集合的な身体である（「器官なき身体」）。「《あなた》は何になりたいの？」という問いには、「私はケーキ屋になりたい」や「僕は社長になりたい」などと無限の可能性があるかのような答えがたしかに返ってくる。しかしながら、言語の中には決まりきった問いしかないであり、この問いに「《私》は…」や「《僕は》…」と答え始めるだけで社会的な要求（強制）にはすでに応答してしまっている。その子はすでに、ある限られた社会的な言語による思考と身体のイメージに感染しており、限られた自分にしかできない（デカルトの誤り）。必要とされているのは、言語とイメージによって強制された思考による問いではなく、《東ドイツ》という「シフター」が起こした変化のように、この世界におけるあらゆる境界を揺るがす自らに由る（自由な）問いを提起する生活である。

## 文 献

- 『バロウズ・ブック』、思潮社、1992。  
ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ、『千のプラトール 上』、宇野邦一など訳、河出文庫、2018年。  
Jacques Derrida, *Le Problème de la genèse dans la philosophie de Husserl*, PUF, 1990。  
ジャック・デリダ、『フッサール哲学における発生の問題』、合田正人・荒金直人訳、みすず書房、2007。  
ジャック・デリダ、『出来事を語ることのある種の不可能な可能性』、西山雄二・亀井大輔訳、『終わりなきデリダ』、法政大学出版局、2016。  
ミシェル・フーコー、『外の思考』、豊崎光一訳、『フーコー・コレクション2』、ちくま学芸文庫、2009年。  
マウリツィオ・ラッツァラート、『記号と機械』、杉村昌昭・松田正貴訳、共和国、2015。  
リー・マッキンタイア、『ポストトゥルース』、大橋完太郎監訳、人文書院、2020年。  
ニーチェ、『善悪の彼岸』、岩波文庫、2007年。  
ジョン・オースティン、『言語と行為』、飯野勝己訳、講談社学術文庫、2019年。  
山内一也、『ウイルスの意味論』、みすず書房、2020年。